日本語版への序文

拙著『明日の法律家（Tomorrow's Lawyers)』の第３版が日本語に翻訳されたことを大変光栄に思う。丁寧かつ熱心に翻訳作業をされた池内稚利弁護士に心から感謝している。また、この序文を書く機会を与えられたことも大変な栄誉である。

私は2007年に一度だけ日本を訪れたことがある。妻と娘とともに、人生で最高の休暇を過ごした。息をのむような景色、非常に美しい庭園、素晴らしい食事、ハイテクな雰囲気、そして出会った多くの人々によるもてなしを味わいながら、方々へ旅をした。この旅は休暇であると同時に仕事でもあった。後者については、私の友人である葛西康徳教授が親切に受け入れてくれた。最高裁判所への訪問や、法律事務所の弁護士、企業内弁護士、法学者など、各種会合での講演を企画してくれた。さまざまな会話から多くのことを学んだ。

その講演旅行で使用したスライドを振り返ってみると、私の講演は、2008年に初めて出版された『法律家の終焉？（The End of Lawyers?)』という、おそらくは不適切なタイトルであった別著で展開した議論に焦点を当てていたことがわかる。しかし、講演やその書籍で取り上げたテーマの多くは、今回の著作にも盛り込まれている。何よりも、私の仕事と本書は、法律の世界における変化の可能性と魅力について、また、法律の運用や裁判所の運営を改善するためにデジタル技術をどのように活用できるか、また活用すべきかについて論じている。他のすべての産業やマーケットと同様に、法律もアップグレードされなければならないと私は

主張する。そのために、法律専門家は、「明日の法律家」になることを望むのならば、新しいスキルや学問を学ばなければならない。

私はスコットランド法を学んだ者として本書を執筆しているが、本書で述べたことが日本にとっても有益であることを願っている。私の主眼は、突き詰めれば、実体法よりも、社会、政府、ビジネスにおける法の役割にある。

未来について執筆する際に常に直面する課題の１つは、新しい技術やテクノロジーが目覚ましいスピードで出現していることである。それは、私の著作が常に時代遅れになることを意味する！

この課題は、人工知能の飛躍的な進歩により、この２年間で特に顕著になった。特に「生成 AI」の分野では、オープン AI によって ChatGPT がリリースされた2022年後半以降、世界中で爆発的な成長と投資がもたらされている。これは私が本書の原稿を書き上げた後の出来事である。しかしながら、読者は、この動向やその他の発展が、本書を通じて私が予想する大まかな軌道と一致していることに同意されるであろう。

AI は今後も急速に進歩し、その速度は上がっていくであろう。そのため、ある段階で本書の改訂版が確実に必要となるであろう。しかし、まだそのときではない。それまでの間、私は日本の読者に心からのエールを送るとともに、我々が直接会って対話できる日を心待ちにしている。

リチャード・サスキンド
2024年10月21日
イギリス、ロンドンにて